

週刊読書人(平成25年4月17日)

佐伯 一麦

麦主義者の小説論

デビュー以来三二年にな  
てという佐伯一麦の初めて  
の文学論的なエッセイ集で  
ある。

古典的なところでは徳田  
秋声や志賀直哉、川端康成  
など、思いがけない人とし  
て真山書果などもあるが、  
主には同時代作家の作品  
集、文庫などへの解説や折  
に触れての交友を述べた文  
章が集められている。いす  
れもこの作家らしい実感に  
発した鴉鴉な読みや解釈が  
行き渡っていて、読んで気  
持がよい。そして、その気  
持ちよさのなかにはもう一  
つ、選ばれ、あげられてい  
る作家たちの質の問題があ  
るかもしれない。それは、  
たとえば和田芳恵、野口富  
士男、八木義徳、あるいは  
庄野潤三、三浦哲郎、古井  
由吉等々、必ずしも私小説  
一筋というわけではない  
が、華やかな評判などは  
無縁な、ごくごく地味で堅  
実な作家たちがほとんどだ  
からだ。

もっとも、こつした選択  
は必ずしも著者の意図はか  
りではないであろう。そこ  
には作家に原稿を依頼した  
ときどきの編集担当者の判  
断も働いているに違いな  
い。しかし、そうであった  
としても、この作家の仕事  
ぶりを認識し、信頼した数  
々の編集者と、それによら

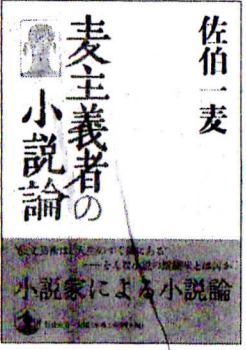
# 実小説作者の私小説的、実践的文学論

勝 又 浩

特集のために寄せてもらっ  
た原稿だった。力のない雑  
誌であるためにいろいろこ  
迷惑もかけてしまったのだ  
が、佐伯一麦と上林暁とい  
う取り合わせ自体は我々が  
佐伯氏の小説に惚れ込んだ  
うえでの見立てであった。  
案に違わず作家がそれによ  
く心えて下さったわけだ  
が、今、こういうふうにな  
のタイトルにまで採られて  
みると、何やら怪我の功名  
だったような誇らしい気持  
にもなるから不思議だ。

その「麦主義者から冬主  
義者へ」で、著者はこんな  
ふうと言っている。上林暁  
の、人生の冬景色こそが自  
分の文学の柱だ、自分は「冬  
主義者」だという揚言に倣  
って、自分も、世界のどこ  
にでもある麦、人の生活の  
根幹に繋がる麦こそ我が  
文学の基本、自分は「麦主  
義者」だ。そして、ペン  
ネーム「一麦」もそういう  
ところから選んだ名だった  
と打ち明けている。言い換  
えれば、小説を「理論や思  
想ではなく、自分の肉体と  
全生活を賭けて」書くのだ  
という覚悟でもある。

本書の冒頭には、東日本  
大震災半年後の仙台市での  
こと、市民講座で取り上げ



四六判・282頁・2300円  
岩波書店  
978-4-00-024901-0

★ささき・かずみ氏は作  
家。著書に「渡良瀬」還  
れぬ家」「光の闇」フ  
ルゲ「鉄塔家族」ア  
・ルース・ポイ」「シ  
ョート・サーキット」と  
りどりの円を描く」「石  
の肺」「震災と言葉」な  
ど。一九五九年生。